



# 猫は煤都に 空を見る



## 1 猫は煤都に空を見る

深い深い地の底が、まだ真っ暗で冷たくて。

あたかも、お空も、まだ苗字のない名前だけのチビすけで。  
旧都の端のお屋敷には、誰が住んでいるのかもよく知らず、  
ただ毎日、必死になって生きていた頃のこと。



「えーと、ろく、たす、さんは、くり上がって……」

「……繰り上がらないよ」

煤まみれの板切れに、ミミズがのたくったみたいな数字が増えていく。木炭で汚れた指を一本一本折っては数え、そうしているうちにどこまで書いたかを忘れてしまふらしい。物覚えの悪い馬鹿鴉に溜息をついて、あたいはうんと背を伸ばした。

頭の上は相変わらず、うんざりするくらいの紺鈍色。

背比べするみたいにずらり並んだ練鉄所の煙突からは、煤と煙の混じった蒸気がもくもくと立ち昇り、冷たい岩の天蓋を煙霞の向こうに覆っていた。

真っ黒な油と灰桜に汚れた穴蔵の中、傍らの大きなパイプを、蒸気がぶくぶく唸りをあげて通り抜けてゆく。寒くないのは有り難かったけれど、ちりちり喉を炙るような灰まみれの空気の悪さに、何度も咳が込み上げてくる。

「あっ！ そうか！ わかったよお隣！ 最初にろくがあって、そこにさんだから、隣からじゆう借りてきて……！」

「借りてくんなってば」

「……うにゅ？」

### 3 猫は煤都に空を見る

尻尾の先でぺちんとおでこを叩き、板切れにおおきくバツを付けてやると、こいつは不思議そうな顔で首を傾げる。何がいけないのか全然わかってない顔だ。勘弁して欲しい。

「えーと、ろくが最初にあつて、それに、いち、にい……」

煤で真つ黒な顔をこすり、鼻をたらしながら指を折り折足し算と格闘しているのが、空といふ地獄猫。

こいつは捨て子で、孤児<sup>みなしご</sup>だった。ある寒い日の夜に、尻に卵の殻をくつつけたまま工房の前でわんわん泣いていたのを雉虎<sup>きじとら</sup>の親方が見つけたのだ。もし誰にも気づかれず朝まで放っておかれていたら、路地裏の浮浪児たちみたいに凍え死んでいただろうから——まあ、運が良かったと言っているのかもしれない。

だから空はおしめも取れないよちよち歩きの頃から、親方の尻にくっついて、陽光<sup>ようこう</sup>炉の火力調整を手伝わされていた。工房の職人たちだって、役に立たないガキを食わせておく趣味はなかったんだらう。

毎日毎日、朝から晩まで炉の周りをやかましく走り回って、煤だらけの油だらけ。背中のおこい羽根が一番黒くないんじゃないかと思うくらいだ。伸ばし放題の髪は固まって針金のようにはさばさで、まともな服を着ていたことなんて一日もない。

あたいよりも年下のくせに、いつのまにかぐんぐん手足が伸びて、いまでは背丈も追い抜かれた。とにかく物覚えが悪いと親方には頭をひっぱたかれてばかりだが、工房でも一端の働き手だ。

そのぶん空の頭はからっぽで、ろくに字も読めやしない。だからこうして、二桁の足し算にも難儀する有様だった。

「うにゅ……」

板きれに並ぶ数字を前に、ぷすぷすと頭から煙を噴きはじめる空。板切れの上を占領していく炭文字は増える一方だが、一向に答えは出てこない。自信なげな「7」にバツを付けて、あたいはごろんとうつぶせに寝転がる。ぼろ布を敷いた蒸気パイプをお腹に抱いていると、ぽかぽかと暖かくて、つい大きな欠伸まで出た。

工房の立ち並ぶ<sup>はいせき</sup>拝石通りの向かいでは、技師組合の金掘り<sup>かねほ</sup>達が騒がしく走り回っていた。新しくできた二十七番目の坑道から、砒素の鉱床が見つかったらしい。金掘りのお爺<sup>エカシ</sup>の号令の下、人相の悪い山師たちが怒鳴り合い、重機に工具を抱えて坑道の奥へと行列をつくる。そのうちあそこにも新しい蒸気パイプが延びて、次の鍊鉄所が立つのだろう。

ここは旧都。かつて、地獄と呼ばれていた場所にできた妖怪達の街だ。地の底の大空洞に、いつしか棲みついた、嫌われ者たちの吹き溜まり。

なんたって地底は地面の底だから、どこを見たって真っ暗闇で、明かりの無い中ではあたいは自分の尻尾の先をみつけるのも苦労するくらいだ。水も凍ることができないくらいに恐ろしく寒いし、どこを見ても岩と鉱物と砂しかないので、いくら悪食の妖怪でも、まともに暮らしていけない場所だった。

だから、地底ではずっと、灼熱地獄の炉の火を絶やすことができずにいる。

陽光炉はこの地底の心臓だ。何百年も昔のお爺達が苦勞して作り上げた、太陽の欠片を燃やす大きな炉。真つ暗闇の地底を照らし出し、あらゆるものが凍りつく寒さを暖めてくれる。昔は七つもあったのだけど、今はおんぼろの六番炉と、壊れかけの三番炉の二つを残すだけ。

それでも、この炉があるから、あたいたちは冷たい地の底で凍え死なずに生きていける。

陽光炉が燃やした煙と煤は、高い煙突から立ち昇り、地底のそこらじゅうにこびりついて建物を汚し、住人達は肺を患う。天井で冷えた水蒸気は白い灰の混じった雪華になって、冷たい地面に降り注ぐ。

そうやって燃え続けるこの炉のほんとうの役目は、暖を取ることじゃない。

たくさん、死体を燃やすことだ。

大昔、この地底は地獄だった。えらい裁判長の閻魔様と、えばりくさった地獄の官吏と、罪人を苛めるおっかない鬼達がたくさんいて、てっぺんの見えないくらい背の高いお役所のなかで、朝から晩まで山のような書面をやりとりしながら、何万という罪人を日々責め殺す場所だった。

その頃の地底は、死者の魂を炙る灼熱地獄の熱で今よりもずっと暖かく、ずっと活気のある場所だったという。七つあった陽光炉は今とは比べ物にならないくらい強い火力で、灼熱地獄のマグマを滾らせ、皓々と地底を照らしていた。

けれど新しく赴任してきた閻魔様とその腹心の死神が、お役所で蔓延していた不正を暴き、横行していた官吏たちの悪事を曝け出したことで、たくさんの方々が下り、地獄は新しく出来

た部署——是非曲直庁とかいう舌を噛みそうな名前の——の管轄になって、お役所の建物も、罪人の檻ごとぜんぶ他の場所に移転されてしまったのだ。

要らなくなった灼熱地獄は次々に炉の火を落とされて、今はすっかり冷え切っている。わずかに残るのは、ほそぼそと火を灯す六番炉と、壊れかけて残り火をちらつかせる三番炉。

そんな廃墟みたいになった地底に、こっそり移り住んできたのがあたいたちのご先祖様、地上で居場所を失った嫌われ者の妖怪達だった。

明かり一つない、真っ暗闇の凍える寒さ。処刑された罪人たちの怨霊が降り積もって渦を巻き、かつての罪業の残りがすが呪詛をこびりつかせた廃墟。食べるものも着るものもロクになく、誰も好んで近づくことを嫌う地面の底。

そんなところくらいしか、あたいたちのご先祖様たちが逃げ込む所はなかったのだという。

それから、長い長い時間をかけて。どうかこうにか、あれこれと工夫を凝らし、ご先祖様たちは朽ちた地獄の残骸を改修して、なんとか生き延びてきた。

何百年も、ずっと、この地面の底で。

「……ええと、ええと……ろくが、さんで、……うにゅう」

頭から煙を噴きながらしばらく止まっていた空が、のろのろと木炭に手を伸ばす。ふらふらの有様でなおも強敵「6たす3」に挑もうとするが——6、7、8、と板きれに数字を書いていて、ついに四文字目でぶしゅうと煙を吹いて仰向けにぶっ倒れた。

雪華がたちまち溶けて蒸発する。空のおでこはしゅんしゅんと湯気を立てていた。考えすぎ

て熱が出たのだろう。

あたいの頭も別段上等では無い方だけど、こいつの頭の悪さはその比じゃない。それは空自身も認めているところだ。それなのに、いきなり読み書きや計算を覚えたがるなんて一体どういう風の吹き回しなんだろう。

空の寢床は油まみれで臭くって汚くってかなわなかったけど、凍えるほど寒い路地裏に比べれば暖が取れるだけでも大分マシだし、家に帰ったって嫌な事しかない。サボる口実にはちょうどいい、そのはずだった。

けれど、ここまで物覚えが悪いやつに付き合あわせれるとなると、話が違う。

溜息とともに、うんざりと雪のちらつく天蓋を見上げる。

一年三百六十五日、暦のいつだって、旧都の天気は変わり映えのない煤と雪だ。昨日も、今日も、明日も。

きつと一年後も十年後も、変わり映えのない退屈で鬱陶しい日が、ずっと続いていく。

……それなのに。

「——ねえ」

板の端に木炭をぐりぐりとなぞりながら（どうやら計算は諦めたらしい）。

仰向けに、鈍色の空を見上げて。あたいよりも真っ黒な羽根をしたこいつは、きらきら目を輝かせて言うのだ。

「お隣は、太陽って見たことある？」

心から願っていれば、いつか叶うと言わんばかりに。



「……ただいま」

軋む扉をなるだけ静かにそっと閉じて、できるだけ小さな声で、そうつぶやく。でも、静まり返った家の中は、ぎしぎしと軋む床よりもはっきりとその声を反響させた。がさりと聞こえる物音に、あたいの胸の奥に、重苦しい塊がせり上がってくる。

買ったばかりのミルクの缶を下げ、あたいはなるだけ足音が響かないよう、そっと台所に向かった。踏み台の上に精一杯の背伸びをして、戸棚の中に乾いた黒パンと、芽の生えたジャガイモを押し込む。

踏み台を降りたところで、粘ついた咳が聞こえた。

「……帰ったのかい」

窓際のベッドの中に頭をもたげる、不機嫌混じりの偏屈な声。

締め切ったカーテンと、かたくなに閉じられた雨戸。隙間から漏れる灯りが、薄暗い部屋の反対側で揺れる。

「うん。ただいま、ママ」

そっと口にしたあたいの挨拶におかえりの言葉はなく、ベッドの上で、鬱陶しげに咳が繰り返

返された。

あたいは少ない油を慎重に計って、こぼれないようにランプに移し、芯を出して火を灯す。揺れる炎の中で、埃っぽい空気が焦げた匂いを漂わせる。

「燐。さっきから背中が痛いんだよ。さすっておくれ」

「……うん」

あたいはゆっくりベッドに近づき（足音を立てるとママは気に障るとすぐに怒鳴るのだ）、背中を丸めて、こぼれを咳き込むママの、骨ばった背中を撫でてやる。

色あせて、煤の染みついた白い背中。ごつごつとした背中中は冷たく乾いていて、凝った気質と陰鬱な病の気配に満ちていた。

あたいのママは白猫で、絹みたいで真っ白の綺麗な毛並みと、すらりと伸びた二本尻尾が傲慢の、宵町でも有名な遊女だった。若い頃には多くの鼻唄をもち、星熊の大親分にも目をかけて貰ったのだという話を、あたいは何度も聞かされた。

でもいまはその毛並みもすっかり灰色に煤け、ベッドの上で骨ばった背中を丸めて咳を繰り返すばかり。閉め切った部屋の中で毛布にくるまって、日がな一日眠っている。ランプの油の匂いが染みついた、埃だらけの部屋は空気も悪くて、あたいは鼻が馬鹿になっていい匂いなのをずっと我慢していた。せめて掃除くらいしたいけれど——ママは傲慢の毛皮が汚れるからと窓も開けたがらない。

ママは、煤に塗れては毛皮が汚れると、良く身体を拭きたがった。でも、何度お湯でタオル

を潜らせても、ママの薄く灰色に染まった身体は元には戻らない。

そのせいで、暖炉の薪代とランプの油代がかさむばかりだ。ママの薬代と、栄養をつけるご飯のために、あたいの少しばかりの稼ぎはみるみる消えてしまう。

年々歳をとって目も脚も不自由になり、わがままになったママは、あたいの知っている優しかったママとは別人みたいに疑り深くなり、何かあるとすぐに声を上げてあたいをぶった。

「どこに行って来たんだい」

「……親方のところだよ」

「なんだい、もしかしてまた組合の仕事かい？ 燐！ あんな汚らわしい死体運びなんてしちゃいけないって言っただろう！ 何度言ったらわかるんだい！」

「……………ごめん、ママ」

「ああ、みっともない……………！ もう情けなくって表も歩けやしないよ。……………ほんとうに親不孝な娘だねえ、お前は！」

ママは、美しい白猫である自分の子供が、タールをかぶったみたいに真っ黒なのが気に入らないらしかった。そばかすだらけの頬も、ぎざぎざに尖った歯も、長いこと台所に置いたままの蜂蜜みたくなくすんだ色をした赤毛も、みんな嫌いらしかった。

お前がそんなに不器量でなければ、宵町のお座敷に紹介して、きつといい旦那に鼻屑にして貰えるのに。そうでなくとも、お前の稼ぎでもっと羽振り良く暮らせるだろうにと、いつもあたいの前で愚痴をこぼした。

あたいはそれを聞こえないふりをして耳を伏せ、部屋の隅にじっと縮こまってうつむいて、ママの癩癩の嵐が通りすぎるのを待つのだ。物を投げつけられても、殴られても、余計な口をきいちゃいけない。

ひとしきり騒いだあとに、ママの咳が止まらなくなれば頃合いだ。

「ママ。ミルクを買ってきたんだ。飲むよね」

「そうだね。……冷たいのはいやだよ。温めておくれ」

貴重な薪を使って、すぐに冷めてしまうミルクを用意するのは面倒だったけれど、文句は飲み込んで竈に向かう。

ママはカップに口を付けるが、煤が薄く浮かぶミルクに顔を顰め、ほんの二度三度、舌を濡らせただけですぐに飲むのを止めてしまった。テーブルの上にカップを押しやり、それよりも大事な事があるだろうとばかりにあたいを見る。

「燐、手紙は届けてくれたかい」

「……うん」

何枚も何枚も便箋を無駄にして、ママが苦勞して書き上げた手紙は、朝方、組合に行く前に逋信所に放り込んできた。のっぺらぼうでやせっぱちの受付係は、あたいの姿を見るなり不快そうに顔を顰め、切手の額を釣り上げて、文句を言ったあたいを外に叩きだそうとした。

「そうかい、それならもう安心だねえ。燐、良くお聞き。そのうちね、星熊の大親分さんが私

を呼んでくれるに違いないよ。あの方はとても温情深い方だからねえ。そうすれば、こんな寒くて狭いところを出て、またまともな暮らしができるんだよ。お前ももう、あんなみっともない仕事をしなくても良くなるよ」

「……うん」

ママはいつも、星熊の大親分が自分を呼び戻してくれると信じていた。いまは訳があつて遠ざけられているけれど、それは本意ではなくて、また昔のように旧都のお屋敷に呼ばれる日が来るのだと。そのことを話すときだけ、ママはとても嬉しそうだった。

あたいが毎日、へとへとになつて稼ぐ僅かばかりの小銭では、とうていママの言うような『まともな暮らし』には及ばないらしい。

「けほ、ごほつ、ああ……ほんとうにねえ、こんな貧乏くさいところは早く出ていきたいもんだねえ。隣、お前もそんなみっともない格好をしてるんじゃないよ。ああ、まったく、誰に似たんだかほんとうに器量無しなんだからねえ……」

「……………うん」

ママは知らないんだ。その、みっともない暮らしをどうにかして続けるために、あたいが朝から晩まで怒鳴られていることも。

こんな、ろくでなしばかりの連中が棲んでいる地底では、あたいたいなやせっぱちでがりがりの子供でも、全然お構いなしという連中が沢山住んでいて、そいつらのせいであたいた度危ない目に遭いかけたのかも。そいつらからから少しでも目を反らすために、特段みすばら

しい格好をして、誰もやらないような仕事をしているあたいのことなんか。

こみ上げてきた吐き気を堪えて、乱暴に口元を拭う。

この真っ黒い器量無しの毛並、痩せてがりがりの身体のおかげで、ママの言うようにお座敷に上げられずに済んだってんなら、それにだけは感謝したっていい。



ぎい、ぎい、と錆の浮いた猫車が揺れる。

でこぼこした地面を跳ねる車から、重い死体がずり落ちてしまわないように慎重に、けれど足は緩めないように、神経を集中させる。

覆いの布がずれかけ、車の端から腐汁を垂らした足が飛び出しているのを見て、通りがかりの連中が顔を潜め、これ見よがしに鼻を覆った。

あさましい死体拾いが往来に出てくるなど言いたげな視線が背中につき刺さり、食べかけの屑があたいの足元に飛んできた。

あたいの仕事は、掃き溜めみたいな地底でも、いっと嫌われていた。

地底の連中は残らずろくでなしで、いつも酒や阿片に酔っ払ってつまらないことで喧嘩をするので、繁華街では争いが起きない日がない。そういう連中は大抵加減を知らないのです、決まって死者が出た。他にも腹を空かせて行き倒れたり、わずかばかりの稼ぎを狙われて襲われた

りで、路地裏にはいつも死体が転がっている。

死体拾いの仕事は、そんな死体を拾い集めて、組合の保管庫まで持っていくことだ。

死体拾いが仕事をしなければ、地底じゅうに死体が溢れかえってしまうのに——そんなことは誰も気にしない。ひたすらに嫌われて、邪魔に扱われるだけだった。

組合が入っているおんぼろビルは、拝石通りを挟んで工房のちょうど反対側だ。保管庫の入り口、窯守のお婆<sup>おババ</sup>に立ち会ってもらって、運んだ死体の数を勘定する。給料は歩合制で、言い死体をたくさん集めれば、それだけ稼<sup>かせ</sup>ぎも良くなった。

こうやって集められた死体は、炬にくべられて燃やされる。元締めたちは燃料と言う言い方をしていたが、空が言うには、炬に余計なものを放り込むので、かえって火力が落ちてしまい、炬の寿命を縮めているばかりだという。

それでも、死体拾いの仕事がなくならないのは、これが金になるからだ。

地獄の沙汰も金次第——その言葉がびったり合うように、地獄からは貴金属が採れる。地底を網の目のように張り巡らされた鉋脈から掘り出される金銀は、大昔に死んだ罪人たちの業が降り積もったものらしい。生きてる間に罪を働いた連中は、閻魔様の裁きを受けた後、あの劫火の中に投げ込まれた。骨も髪もすっかり溶かされ燃え尽きた魂に残った罪が、灼熱地獄の底に残って、砒素混じりの鉋脈になったのだ。

地獄であることをやめてしまった地底でも、まだいくらかの鉋脈は残っていて、そこから採れる金は旧都の重要な収入源だった。

けれど——いくら現世の罪が底なしからって、ここはもう地獄じゃないのだ。地面を掘り返していければ、いつしか地底の金銀は尽きてしまう。

それを防ぐことを考えたのが、大昔の工房の親方たち。

ご先祖様は灼熱地獄の炎を燃やしていた炉を改造し、かつての地獄のように使うことを考えたのだ。なにしろ地底には毎日のように死人が出る。こいつらをただ路肩で腐らせておくなんて勿体ないことをする法はない。

地獄と同じ焔で焦がされて、燃え尽きずに残ったわずかな罪業は、地の底深くの灼熱地獄跡に落ちてゆく。それから長い年月をかけて、冷えて固まった新しい鉱山から、金掘りたちが罪科の金を掘りだすのだ。

金銀のほかにも、鉱脈からは鉛や錫、鉄に銅も見つかった。死体からつくる鉱脈にはよく砒素が混じっていて、不用意に近付いたやつは簡単に死ぬ。だから金掘りは命がけでこれを掘り出し、工房のお爺が精錬し、使えるようにするのだった。

こうして作られた金銀が、また新しい欲望を生みだすのだ。なんともうまくできている。

陽光炉が駄目になり出してからも、この循環は続けられた。わずかでも鉱脈の足しにするため、地底で死んだものは皆、炉の中にくべられる。そうしてできたわずかばかりの鉄と、ささやかな金銀をつかって、地底に都市をつくり続ける。

年々か細く弱々しくなる炉の炎からは、必死に目を反らしながら。

「早くしろ、愚図愚図してんじゃねえ！」

「わかってるよ！」

ガラガラの怒鳴り声と一緒に、煤まみれのスコップが飛んできた。頼組合の元締めは片目のない鼻で、いつも嗅ぎ煙草の嫌なおいをぶんぶんさせ、ガラガラとした脂声で誰彼構わず殴りつけ、始終怒鳴り散らしているの、多くの連中が嫌っていた。

大人たちに混じって、疲れ切って鉛のように重い手足に力を入れ、死体を階段の上まで運び上げる。チビのあたいがいくら踏ん張っても、馬鹿でかい死体は地面に引きずられ、そこらにぶつかってぐじぐじと汚い汁を撒き散らした。

「おら、邪魔だ、どけ」

ぶんぶんと寄ってくる蛆蠅をうるさそうに払いのけながら、他の組合員たちはあたいを突き飛ばして階段を昇る。

地底の猫は、尻尾の先に紅い恨みの炎を灯し、それを使って怨霊を操るのが得意だ。羽虫がランプに吸い寄せられるように、怨霊たちは生きていた時の妄執に従って、この紅炎を追いかける。これをうまい具合に操作して、自分の手足として使うのだ。

中には怨霊を手ごろな死体に封じ込め、非力な自分の護衛にしている奴もいる。

あたいはこの恨火の使い方が、とりわけ下手くそだった。

他の猫たちは、それこそ目が開くころから当たり前に怨霊を引き寄せて、獲物の代わりに狩りを覚えたりするものだけど、あたいは爪が伸び、髭が生え揃ってからも、まともに怨霊を捕まえることもできなかった。

だから、あたいは他の猫たちが恨火を操って、死体を一列に並べ、ぞろぞろと行列させて組合に向かうのを横目で眺めながら、錆の浮いた重い猫車を懸命に動かすしかなかったのだ。

組合の猫車にどうにか手が届くようになったチビの頃から、この仕事はずっと続いている。けれど、あたいの稼ぎと言ったら、朝から晩まで一日かかっても他の猫の三分の一にも届かない。

元締めは強欲でがめつくて、金にならないことが何よりも嫌いだ。だから、辛気臭い役立たずのガキに金を払うくらいなら、もっと扱いやすく頭の悪い働き手を雇いたいと思っているのは、組合の皆知っていることだ。

それでも、ママが元氣だったころは、星熊の大親分の名前を立ててくれていたらしく、あたいの扱いも少しはマシだったのだ。ママが長く伏せてからは、あたいへの嫌がらせを隠そうともしない。

あたいはこんな地の底での暮らしが大嫌いだ。

じめじめして、冷たくて、煤と埃だらけのこんな場所が。どいつもこいつも疑り深くて陰険で、隙あらば誰かの上前を撥ねてやろうと考えているばかりの――そのくせ、自分がその被害者になるとそのことを柵に上げて怒鳴り散らす連中ばかりのこんな場所が。

でも。

嫌われ者の妖怪達の末裔が、この煤と灰に塗れた地面の底を離れて生きていくことなんてできるはずがなかった。そんな夢を見るのが馬鹿げてるなんてのは、あたいだってもうとつくに

承知していた。

よっぽどの大馬鹿を除いて、そんな事を考えるやつはいなかったんだ。



「ねえ知ってる、お燐？ 地上にはさ、とっても広い青い空があって、その上に大きな太陽が浮かんでるんだって！」

あんまりにもあっけらかんと口にしたその言葉は、完全に不意打ちだった。いくらぼんやりしてたからって言っても限度がある。

そうなんだ。そんなよっぽどの大馬鹿が、ここにいるのだ。

「凄いやね！ だからお燐、わたしね、いつか地上に——」

「この馬鹿っ！」

飛び起きて空の口を塞ぐ。いきなりのことに舌を嚙んでむぎゅっ、と目を白黒させる空に馬乗りになって地面に押し倒し、耳に全神経を集中させてあたりの様子を窺った。

工房の雑踏、金掘りたちの下品な冗談、昼から酔っ払ったろくでなしどもが喧嘩で騒ぎ、甘ったるい月阿片がぶかぶかと立ち昇り、いう事をきかない子供たちへの折檻と打擲が響く。

いつもと変わらない日常。そのなかで、あたいの尻尾はパンパンに膨らんで、焦りと恐怖に震えていた。



反射的に言い返す空。まるで駄々っ子だ。この期に及んで分かってないらしい馬鹿鴉に、指先から爪を伸ばした人差し指を付き付ける。

「これが馬鹿じゃなかったらなにが馬鹿だったのさ！ あんなこと言ったら、いつ大想会だいそうかいのブレインフィンガーがすっ飛んでくるか分からないんだよ！」

「……？ だいそうかい？ ぶれいん、ふいんがー？ あんなことって、地上の話？」  
「だから喋るなっていう馬鹿！」

足元のぼろきれを掴んで、思いっきり空の口に押し込んだ。能天気な鴉はもぐもぐと口元を押さえて暴れ出す。

大想会。地底を見捨てていなくなった闇魔様のかわりに、この地面の底の穴倉を統治している、最悪にクソツタレな組織だ。大空洞の端の、誰も寄り付かない馬鹿でかいお屋敷に、その親玉が潜んでいるという。

そいつは、他人の頭の中を勝手に覗いては秘密を残らず暴きだす、覚り妖怪だという噂だった。信じられないくらい性根のひん曲がったやつで、トラウマをほじくり返し、絶対に隠しておきたい弱みを握って虐め、徹底的にいたぶるのが何よりも大好きらしい。

この覚り妖怪が率いる大想会が地底の実権を握ってから、旧都は恐怖に支配された。

大想会とはどんな小さな反抗さえも許さない。地底の統治は万全で、万事がうまくいっていて、住人たちはみな幸せで、輝かしい未来が待っている。それが大想会のプロパガンダだった。

どう考えてもおかしいのだけど、誰かが少しでも文句を口にすれば、すぐにそいつは掴まっ

て、あつという間に肅清が行われた。

その手足となるのが、揃いの頭巾と覆面を被り、胸に第三の眼を植え付けられたブレインフインガーたちだ。やつらは覚り妖怪に捕まって脳を改造された妖怪の成れの果てで、機械みたいに忠実に覚り妖怪に従い、その端末として地底の端から端までを絶え間なく巡回している。なにしろあいつらは覚りだ。一切の隠し事は通用しない。一度睨まれれば頭の中をくまなく調べられ、どんな小さな反抗心すら暴き出されてしまう。

「いいかい空、命が惜しかったら、そんなことは絶対口にしちゃダメだ。考えるのだって駄目だ。絶対に！」

「絶対に？ ……ちよっとだけでも？」

「決まってんだろ！ 絶対にだ！」

そう。大想会が最大の禁忌にして絶対の罪としているのが、この地底を出ていこうとすること。……地上を目指そうとすることだ。

この地の底のずっと上。地上には美しい本物の太陽と、広い青空と、楽園のような土地が広がっているという。子供の絵本に出てくるような古臭い言い伝え。これを信じて無謀な冒険をしようとした、スカイウォーカーなんて連中も昔はいたらしい。

けれど、今、もしも誰かがこれを真に受けて少しでも地底を蔑み、地上に憧れるようなことを口にしようものなら、たちまちブレインフインガーが現れて、そいつはあつと言う間に攫われ、脳を弄られて廃人行きだ。

地上への憧れを徹底的に根絶するため、覚り妖怪は夢想会を率いて、大勢のブレインフィンガーを動員し、馬鹿馬鹿しい数の妖怪達を殺した。見せしめのため、あるいは統治に反逆する連中を残らず炙りだして処刑するために。

だから今、夢想会に逆らう連中は誰もいない。旧都を治める星熊の大親分も、風穴を根城にするスパイラルダイブの戦士<sup>フレイム</sup>だって、地上の事なんておくびにも出さない。

「……あのなあ空、あんたがどんな夢を見てようがあたいは知ったこっちゃないよ。夢想会のブレインフィンガーに捕まって殺されるのだって、やりたきや勝手にやればいい。でもね、頼むからそれにあたいを巻き込まないでくれ」

地上を目指そうとする奴は、どんな理由があろうと、問答無用で大罪人だ。夢想会はそれを全力で、徹底的に処罰する。ブレインフィンガーは捕まえた奴の頭の中に想念麻薬と自白思念を流し込み、廃人になるまで隅々まで徹底的に調べ尽くして、関与のあったやつらを残らず見つけ出し、捕縛して殺すのだ。

そうやって、この頭の空っぽな馬鹿でも分かるように、丁寧に説明してやっても、それでも空は分かったのかどうなのかはつきりしない顔のまま。

「……うん。わかった!」

「本当にわかってるんだろうね?」

念押しに対して、こくこく頷き返す馬鹿鴉。

それでもこいつは、真っ黒な顔に白い歯を覗かせて、じゃあ、地上は良くないから、いつか

自分もえらい親方になって、地底に新しい炉をつくるのだと夢のような事を言うのだ。

「あのね、お燐」

「……なんだい」

「いつか、お燐も、みんなも、そんな風に怖がらないようになるといいね」

「……………」

こいつは馬鹿だ。底抜けの馬鹿だ。

煤けた間抜け顔が垂らしている涙を拭ってやりながら、あたいは深くため息をついた。



……最悪の一日だった。

特段、特別な事が起きたわけじゃない。いつかこんな日が来るだろうと思って、覚悟を決めていたことが、とうとうやってきたって言うだけの事だ。

いつもよりも寒くて、煙突の噴き上げる蒸気が普段よりも煤けていて、灰色の雪華がいつもよりもたくさん降ったその日。夜更けからひどく咳き込んでいたママは、ベッドの上で身体を丸め、暗いうちから何度も何度も、しきりにあたいを呼んだ。

苦しいから背中をさすっておくれ。喉が渴いたから水が飲みたい、冷たいのは嫌だからお湯にしておくれ。風で揺れる雨戸がうるさくて眠れない。部屋の中が灰だらけなのが良くない、

毛皮が汚れて痒くって仕方がないから、水浴びをしたい。お湯を貰ってきておくれ。すぐに掃除をしておくれ。苦しいから今すぐお医者の先生を呼んでおくれ。ああ、この薬は駄目だ、目に悪いから、別のを貰ってきておくれ。

矢継ぎ早にあれこれと文句を言い、無茶を言いつけ、あたいがなにか言い返そうものなら、ママはこれ見よがしに声を張り上げた。ああ、母親がこんなに苦しんでるのに放っておく氣かい、なんて冷たい娘なんだいとしきりに嘆いてみせた。

ほとんど眠れないままで疲れ切った身体と、寝不足の頭の中で。あたいは考えるのをやめて、言われるがままにママの世話を続けていた。

そうして、夜が白み始めるころ。

鉛が詰まったみたいに重い頭を抱え、疲れ切った足を引きずって、あたいが組合に出掛けていこうとすると、ママはついに癇癇を爆発させた。

「ふざけるんじゃないよ！ 燐、私がこんなに苦しんでいるのに、あんたはまたあんなみっともない仕事をしにくのかい！ ああ、恥ずかしくて表も歩けないよ！ こんなことが知られたら、星熊の大親分もきつと心を悪くするに違いないよ！」

ママの看病のため、あたいはこの日までに組合の仕事を三日も休んでしまっていた。正直、もう休んでいる暇なんてないのに、あたいが無理にでも出ていこうとするとママは癇癇を起こして、親不孝者と泣き喚いてあたいをぶった。

お前は どうして そんなに不器量に生まれたんだ、娘として恥ずかしくないのかい、少しはあ

たしの苦勞も考えたらどうなんだい。

わんわんと頭の奥で反響する声に、言い返す氣力もなくなっていた。

癩癩に暴れ、咳きこんでベッドに伏すママをどうにかなだめすかして、お医者先生の薬を貰ってくるのだと言って家を出たころには、もう昼前に近かった。

最初に向かった診療所では、受付の狼にじろりと睨まれ、狒々の医者先生にはとびきり嫌な顔をされ、ほんの三日ぶんばかりを放ってよこされ、次に診察費を持ってこなかったらもう薬は出せないと追い返された。

重い氣分で向かった組合では、いまさら何をしに阿保面さらして出てきやがったんだこの愚図がと元締めに怒鳴られ、スコップで頭をぶん殴られた。窯守のお婆には元締めの機嫌を損ねたと嫌味を言われ、ダメ元で頼んだ給金の前借りは当然のように無視された。

もう、歩くのも嫌になるほど辛い足を引きずって、なんとか家に帰ってくれば、不機嫌な様子地主がドアの前で待ち受けている始末。

これまで、ママの病氣を理由にどうにか払いを待ってもらっていたけれど、それももう限界だ。今月の終わりまでに家賃のツケを払わなければ、この家だって追い出される。

病氣のママを抱えて、あたいたいながきにはもう、どこにも行き先なんてなかった。

「……どう、しろってのさ」

何もかも嫌になったあたいは、薬だけ台所に放り込んで、そのまま家を飛び出した。

家賃の事も、支払いのツケも、ママには相談していない。できるわけがなかったし、万が一

ママの機嫌がよかったとしても、どうせいつものように、星熊の親分に、どうかご援助くださいなんて、まるで役に立たないみっともない手紙を書くだけだ。

ママは何もわかってない。あたいが、出せなかった親分への手紙を残らず炉に放り込んで焼いてしまっていることを。通信所の切手代が払えるくらいなら、あたいは昨日も今日もご飯を抜いたりしていい。もう、親分が迎えに来てくれるなんて、天地がひっくり返ってもありえないってことが、ママにだけは分かっている。

惨めに頭を下げるんなら、あの偏屈な大家か、偉そうな先生にすべきなんだ。そうすれば、もう一月くらいは、支払いを待ってもらえるかもしれないのに。

棒のような脚を引きずって、からっぽで痛いお腹をさすり、路地をあちこち彷徨って。雑踏に紛れた屋台や食堂から立ち昇る美味しそうな匂いに引き寄せられては、みずばらしい浮浪児を追い返す怒鳴り声に追い立てられて。

「……どうしよう」

工房近くの蒸気パイプにもたれかかり、あたいは途方に暮れていた。行く先もない。ごはんの当てもない。今日寝るところだって見つからない。ひもじいお腹が切なく食べ物を探せる。家に帰ってママと顔を合わせるのを考えるだけで、おなかの奥が重くぐるぐると澱む。寝不足の頭はずきずきと重くて、瞼はくっ付いてしまいそうなくらいに重かったけど、ここで眠ったりしたら夜のうちに冷たくなって死体の仲間入りだ。

『お前が、もう少しまともな器量ならねえ』

一瞬頭をよぎった怖気の走る想像を、ぶんぶん頭を振って打ち消す。

「あれ？ お隣、どうしたの？」

馬鹿みたいに間抜けな声が聞こえたのは、空腹と眠気でぼんやりとしていた時だった。

「……空」

きっと、よっぱど気が弱っていたんだろう。

よりもよって、空に弱音を漏らしちまったんだから。

今まで、こいつにママの話なんてしたことはなかった。空は孤児で、生まれたのは卵で、パパやママってものがいまいちよく分かっていなかったし、なにより、天涯孤独のこいつの前でママの話をして同情を引こうなんていうのは、最悪に格好悪かったからだ。

それでも、どうせ役に立たないけど、誰かに言いふらすような奴でもないと思っていたからかもしれない。ぐるぐると頭の中で渦巻くいやな気持ちに際限なく膨らんで、パンクしそうになるのが嫌で。あたいは、自棄になってこいつに金の無心をしていた。

「それなら平気。お金、少しならあるもん」

「あん？」

けれどこいつは。やっぱりいつものように、なんの厭味も疑問もない顔で、そんな風にさらにと言ったのけやがったのだ。

どうせいつもの出まかせだろう。

そう思ったのだって当然だ。だってこいつは、繰り上がりのある足し算もまともにできない

ような奴だ。金勘定なんてできるはずがない。

期待なんて全然——本当に、まったくしてなかったかと言うと、ウソになるけど。でも、どうせ空の持つてる小遣い銭じゃたかが知れてる。ほんの少しだけでもミルクを買って、ママのご機嫌を窺えば、癩癩と愚痴の中で寝るよりいくらかマシな気分で眠れるだろうって、それくらいのことしか考えていなかったんだ。

そんな風に思っていたあたいは、空が枕の下から引っ張り出してきた分厚い封筒を見て目を剥いた。炬の管理室の屋根裏、ボイラーが轟音を立てる狭く苦しい寢床、油の染みた封筒からは、汚れてくしゃくしゃになった圓札が、全部で三百枚ばかり。

今まで、一度も見ることがないような大金だった。

「それで足りる？」

空は馬鹿みたいに首をかしげながら聞いてくる。

足りるとか足りないとかそんな問題じゃない。駒寄通りの大きな店で、ショーケースに飾ってあるぴかぴかのドレスを買ってもお釣りがくる額だ。あたいは思わず、からからの喉に唾を飲み込んでいた。

そう。そうだ。つい、付き合いのある浮浪児連中と同じように考えてしまっていたけれど、空はどこからか身受けされたわけでもないし、ただ働きをさせられてるわけでもない。

工房の親方は不愛想で偏屈だけど、あたいを虐める組合の連中とは違って、ちゃんと働いた分の仕事の面倒は見る大人だった。空はいつも失敗をして、ひっきりなしにぶん殴られていた

けれど、それでもちゃんと徒弟の一人として、働いた分だけの金は貰っていたのだ。

もちろん、見習いがもたらえる額なんてたかが知れている。でも空は普段からロクに買い物もできないようなやつだ。日がな一日工房で過すごしているのだし、死ぬほど不味いけど工房には賄い飯もあった。なにより空は住み込みで、親方は何かあればすぐに手を借りるために呼びつける。空も嫌な顔一つせずすっ飛んで行くから、寝ている時以外はずっと炉の周りを走り回っているような塩梅で、工房の誰よりも働いていたのだ。

だから、何年分もの給金が、きつとほとんど手つかずで残っていたに違いなかった。

「……空、これ、……いいのかい？」

「うん。私がつけてても、どうせ使わないもん。お隣、お金いるんだよね？」

「そ、そりゃ、そうだけど」

文字通り、喉から手が出るほど欲しい。おなか为空腹を訴え、目の前がちかちかする。あれがあれば、ママの薬代と借金を利子付けてつかえしても、まだ一年は楽に暮らしていける。

それでも、ちっぽけなプライドが邪魔をして、素直に領けないでいたあたいに。

空はこくりと首を傾げ、ぽんと手を叩いてみせた。

「じゃあ、これは月謝ってやつにする！ お隣は私の先生だもんね！」

勉強を教えてくださいましたお礼だよ、と。いい考えでしょとでも言いたげに、空は札束をまとめてあたいに押し付けようとした。

「ば、馬鹿。全部なんか貰えるわけないだろ！」

反射的に叫んでいたのは、きつと、その札束が、あたいが生まれてから一度も触ったことがないくらいのものであったからだ。

「うにゅ？ そうなの？ よく分からないや。じゃあ、お隣が欲しいだけでいいよ」

「……あ、ああ」

そう言いながら、あたいは、からからの喉に唾を飲み込んで。

給金の札束から、その半分……空の稼ぎのゆうに三年分を引き抜いていた――



あたいだって初心な子猫じゃない。このクソツタレな地底で生きていくんなら、多少の悪さはするもんだ。盗みだって、万引きだって、両手の指じゃ足りないくらいやっていた。路地裏の浮浪児たちとつき合うには、それくらいやれなきや相手にもされなかったんだ。

だから、これくらいの度胸は付いているつもりだった。頭の足りないやつを煙に巻いて、稼ぎを撒きあげるくらい、なんてことない事のはずだった。

けど、そう思おうとするあたいの胸では、やかましいくらいに心臓が鳴っていた。

あいつが要らないって言ったんだ。好きにしていって言ったんだ。だから、構やしないはずなのに。そのたびに空の能天気な顔がちらちら頭に浮かんで、心がざわついて、お腹の奥がズンと重く感じる。

(ちがう、あいつが馬鹿だからいけないんだ、騙されるやつが悪いんだ)

自分に言い聞かせながら、ママの治療費と家賃のツケを払い、薬を買って、それから普段近付きもしない駒寄通りの店で綺麗な櫛とリボンを買った。三本角四本腕の店員はあたいの身なりをじろじろと見て、胡散臭げに支払った圓札が本物かどうか長い事調べていたけれど、やがて諦めて支払いに応じてくれた。

ママにはミルクたっぷりの蜂蜜粥。八角蜂の蜜はとんでもなく高かったけど、喉の滑りを良くする甘さにすっかり上機嫌になったママは、めずらしくベッドから起きてごはんを食べた。あたいもぶたれずに一緒にごはんを食べられたのは、随分久々のことだったと思う。

それから元締めのところに行つて、何度も地面に頭を擦りつけて、どうにか許してもらふ事ができた。まともに眠れて、お腹がいっぱいになっていれば、罵声にも黙ってはい、はい、すみません、ごめんなさいと、哀れな声を出して謝り続けることは難しくなかった。

それからしばらく、空のところに足が向かなかつたのは、騙していたことの後ろめたさがあったからだろう。

それでも、組合のお使いで工房に來た時に。

空が大怪我をして寝込んでいるという話を聞かされて、それでもなお知らぬ存ぜぬのふてぶてしい顔を貫けるほど、あたいは図太くはなかつたみだいた。

ほんとうに、酷い有様だった。羽根は折れ、顔は倍近く腫れ上がって、前歯も三本折れていた。手足は痣だらけ。右足も折れていて、直ってももうまっすぐ歩けるかも分らないという。

「ごめん、お隣。……おかね、とられちゃった」

それなのに、こいつは言うのだ、

あたいは、きつと困っているからと。取っておいたお金はそのために使っていいと言うつもりだったのに。ちゃんと毎日、なくなっていないか数えていたところを見つかって、それを取り上げられてしまったのだと。

あたいに払う月謝がなくなってしまったと、空はあたいに謝りさえした。

ああ。馬鹿だ。

こいつは馬鹿だ。底抜けの馬鹿だ。

こんなにも能天気で、他人のことを疑わない馬鹿だなんて、思わなかった。

空を襲ったのは、いつも路地裏に屯して、にやにやと厭らしい笑みを浮かべ、日がな一日、質の悪い月阿片を吸い、密造酒を食らって暴れてるろくでなしの連中だった。たまに日雇いで工房や組合の仕事をしていたが、まともに働かないので誰からも嫌われていた。

あの中には、いつだったかあたいを暗がり連れ込んで汚らしいものを押し付けてきたやつがいる。思い出すだけで吐き気がした。空は工房働きで、手足も指先まで真っ黒に油と煤に汚れていたから、殴られる以外の事はされなかったんだろう。それが良かったなんて、口が裂けても言えないけれど。

——あたいのせいだ。

あたいが、慣れない金を使ったから——この連中が、空の溜めこんでいる金に目を付けた

んだ。それまで毎日の飯にも不自由してたようなちびガキが、いきなり金払いが良くなったんだから、どこから盗んだのだろうと怪しまれるのは当然だ。

あたいが先に狙われなかったのは、単に運が良かったか。

頭の足りない空なら、よく分からずに従うだろうと思ったからか。

大想会に睨まれた窮屈な狭い地の底で、行くところのないロクデナシ連中が寄り集まった掃き溜めだ。互いの上前を跳ねて、ちよっとでも稼ぎがいいやつの懷を横取りするなんて、当たり前に行われている。弱みを見せれば、骨までしゃぶり尽くされる。そんなのは、ここじや当たり前のことだったのに。

あたいは、すっかり舞い上がって、そんなことにすら気が回らなかったんだ。

(くそ、なんで、なんでっ……！)

本当に、あたいは何をやってるんだろう。

こんな、安っぽい正義感なんて、持ち合わせてるつもりはなかったのに。

適当な嘘をつけて、誤魔化してしまえば、空は馬鹿だから気づくはずもないのに。

ぐるぐると頭の中で止まらない熱を叩きつけるように、あたいは路地裏を走っていた。冷たい石畳を蹴散らし、奥歯を噛み締め、降りしきる雪華を掻き分けて。

連中はすぐに見つかった。案の定、安酒の酒場に居付いて、不細工な女を侍らせ、周りの連中を押しのけて馬鹿騒ぎをしていた。汚れた札を振りかざし、金ならあるぞと叫んでいる。

いい大人のくせに、ガキの金を分捕って遊んでる、何よりのクソツタレだ。奴等の前に飛び

出し、そのテーブルに思いっきり足を引っ掛けて蹴り倒す。

ひっくり返って派手に飛び散る料理を踏みつけて、あたいは牙をむき出し、ありったけの因縁を乗せた視線を連中に叩き付ける。

「返せよ」

「あん？」

「その金は、あたいの友達のもんだ。返せよ！」

そう口にしてくらくらする。反吐が出るくらいに偽善だ。先に空の稼ぎを分捕ったのはあたいだというのに。

喧嘩は先手必勝だ。連中が動くよりも先に、あたいは一番近くに居た一つ目鬼の鼻めがけて頭突きをぶち込んだ。伸ばされた手に噛みつき、容赦なく骨まで噛み千切るつもりで牙を立てた。口の中にぬるりとした感触。悲鳴が上がる。

「てめえ、ツざけんな！」

がつんと頬を殴られる。眼の裏にちかちかと火花が散った。——くそ。こちとらこれでも女なんだぞ。よりにもよって顔とか、もう少し加減くらいしろよ。

もともと、大の大人が四人だ。チビのあたいが一人で相手になるはずもない。けれど、損得なんか考えずに、あたいは遮二無二そいつらに飛びかかった。ありったけの吠え声を上げ、牙をむき出し、爪を振るって暴れまくる。顔を思いっきり引っ掻き、向う脛を蹴り上げる。ごつい岩肌の二つ頭の顔を蹴り飛ばしてやろうとしたところで、その脚が掴まれていた。

「あつ、クソ、離せよっ……」

足を掴んだまま宙づりにされちゃ、どうしようもなかった。あたいはまだほんのチビすけで、満足に妖力もつかえない。逃れようと暴れても男の手を振りほどけないまま、あたいは地面に叩きつけられた。背中をしたたかに打ちつけ、息が途切れる。

男たちは容赦なくあたいを殴った。顔を三回、お腹を二回ぶん殴られて、それでもう、あたいは満足に動くこともできなくなった。馬乗りになって男の一人が、あたいの口を塞いで、何度も殴り付ける。鉄錆の味が口の中に広がり、鼻の奥に熱いものが広がる。

必死にもがくあたいの身体は、下敷きにされて動けもしない。お下げを掴んで頭を引っ張りあげられて、そこをもう一回殴られた。

「っ……………」

眼の裏に真っ赤なものが広がる。熱を持ってうずく瞼、熱い痛みが頭の奥に染み込んでいく。上に跨った男が、あはあ息を荒げ、悪意を滾らせた視線が、あたいを見下ろす。

ああ、やばい。ぼんやりと頭の奥が叫ぶ。はっきりした状況は分からなくても、酷いことをされるのだというのはわかった。

でも、手足がガクガク震えて、思う通りに動かない。心はまだ熱く滾っているのに、チビの身体は言う事を聞かない。

きつと。

お空も、これと同じことをされたんだ。

（——ッッ）

がり、と奥歯を噛み締めて、腫れた脛の隙間から、男たちを睨み返す。伸ばされた指に噛みついて、顎が砕けんばかりに牙を立てた。その反抗心を理由にまた殴られ、口の中に汚い布つきれを突っ込まれる。

（え、ぐっ……）

喉奥に押し込まれた腐臭に、胃の奥がえずき、眼に涙が滲んだ。

押さえつけられた手足。自由にならない身体。髪を掴まれて引っ張られる。男たちの罵声と笑い声。際限のない悪意がこだまする。

（くそ……離せ、離せよっ）

上手く開かない脛で、男たちを睨みつける。どうしてもこいつもクソツタレだ。こんな掃き溜めみたいな地面の底で、くだらない理由で、自分達の方が利口だと誇りたがる。

「ぞ、けんなっ」

こんなやつらに。こんな連中に。あたいを、あたいたちを、自由にさせてたまるもんか。沸騰しそうな怒りに。滾る心に。背骨が端からちりちりと焦げるような熱い感覚があった。それが頭のとっぺんから、身体の真ん中を貫いて溢れ出す。

突如ぼうと噴き上がった炎が、男の顔を炙ったのはその時だ。ちょっとした火花くらいの可愛いものだったけれど、上手い具合に目に入ったみたいで、男が顔を押さえて仰け反る。無様に呻くそいつの顔に、生きのいい怨霊がめり込んでいるのを見て、あたいは咄嗟に緩んだ腕の

下から抜け出す。

ちりちり、ちりちり。ぱちぱち。めらめら。

頭の奥で弾ける火花が、身体のまんなかを貫いて、外へと溢れ出す。

あたいの尻尾の先には、赤い炎が火の粉を上げていて。それに吸い寄せられるように、あたりに散らばっていた怨霊たちが集まってきていた。ふい、と動かしした尻尾の先にじゃれつくように動く怨霊達を見て、あたいはそれを本能的に察する。

「手前え！」

呆気にとられていた男の一人が、頭に血を昇らせて飛びかかってくる。あたいは牙をむき出し、手を地面について、ありったけの敵意をそいつに叩きつけ返す。

「殺——<sup>シヤ</sup>—— ツッ——！」

頭がぴりぴりする。

あたいの吠え声に、ざわりうごめく怨霊達が、一斉にそいつらに飛びかかった。



いちどおっ始めたなら、二度とやり返す気が起きないくらいに痛い目に遭わせなきゃいけない。それが喧嘩のコツだ。立てた牙を離さず、尻尾を噛み千切り、指を食いちぎって、暴れに暴れる。あとのことなんて考えない。死ぬまで思い知らせるだけだ。

「いいか、二度と近寄るんじゃねえぞ！」

大の男四人相手に、これくらい言わせたのだから、たぶんあたいにしてもよくやった方だ。ぼろ屑のように路地裏に放り捨てられたあたいだけれど、どうにか意識だけは残っていた。折れた足を引きずって工房の塹までに帰り付いたのは、その日の夜遅くだ。

連中は、金をあらかた賭場で巻き上げられ、残ったわずかな分も抱えていた酒瓶と出来の悪い月阿片に変えていた。だから、取り返せたのはせいぜい、油染みまみれの封筒くらい。

「お隣！？」

「ずいぶん減っちゃったけど、それはお前のだ、お空」

ほんの少しだけ残った、あたいが騙した分の余りをその封筒に突っ込んで。あたいが差し出すと、空は自分が悪いわけでもないのに、何度も「ごめんなさい」と謝った。正直、謝りたいのはこっちだったのに。

仏頂面の親方は、あたい達に怪我の治療代を請求したりはしなかった。きっと空の給金が一月か二月、出なくなるのだろう。空はその事について何も言わない。

いい加減、罪悪感に耐えかねたあたいは、ついに洗いざらいを空にぶちまけた。空が知らないのに付け込んで、給金を持ち出したことも、何もかも全部。

それなのに、こいつはあっけらかんとした顔で言うのだ。あたいがどれだけ悩んで、絶交される覚悟だとして、一世一代の告白をしたのなんてこと、考えもせずに。

「ううん。お隣が無事だったらそれでいいよ。ね？」

呆れた。心底、呆れるしかなかった。

本当に、この地底は、クソツタレな場所だ。誰からも嫌われ、追い出されたやつらが集まった、嫌われ者の街。どこに行っても最悪なロクデナシの連中しかいない。誰かに優しいそぶりなんて見せようものなら、次の日には有り金をふんだくられて、路地裏で冷たくなっている。少しでもこんな地の底は嫌だと口にすれば、大想会が処刑にすっ飛んでくる。

でも。

けれど。

そんな、クソツタレの地の底で、これだけ酷い目にあわされても、あたいはなお、あのロクデナシな大人たちを軽蔑した。あたいたちを踏みにじる、理不尽な暴力に抗った。

あたいの、このひねくれた心の中に。まだ、誰かの弱みに付け込むことに躊躇いが残っている。あいつらよりも少しはマシなやつになりたいと、思っているなら。

もう二度と空を裏切っちゃだめだと、あたいはそう決心した。

「……なあ、お空」

「うにゅ？」

そうしてこの日から。あたいと空は親友になった。

あたいも空も、まだずっとずっと小さくて、まだ苗字のない名前だけのチビすけで。地底の底もまだ暗くて、深い深い地の底が、まだ真っ暗で冷たくて。

旧都の端のお屋敷には、誰が住んでいるのかもよく知らず、

ただ毎日、必死になって生きていた頃のこと。

それでもこの日は、あたいにとって忘れられない日になった。



……ずっとあとになって、恥ずかしさ混じりで聞いてみたら、空はこの日の事なんてまるつきり覚えていなかった。なんて薄情なやつだと憤慨して文句を言えば、この鳥頭は、なんでもない事のようにこう言うのだ。

「だって、お隣と私は、ずっと昔から仲良しでしょ？」

こういう時、こいつにはたぶん一生敵わないと、あたいと思う。

(了)

【奥付】

「猫は煤都に空を見る」

平成29年1月29日

旧地獄温泉

お隣の湯

発行：折葉坂三番地

<http://oruhaazaka.dojin.com/infoblog/>

著者：銅折葉

※本作は「上海アリス幻樂団」様の「東方Project」の二次創作です。